

書林

第91号

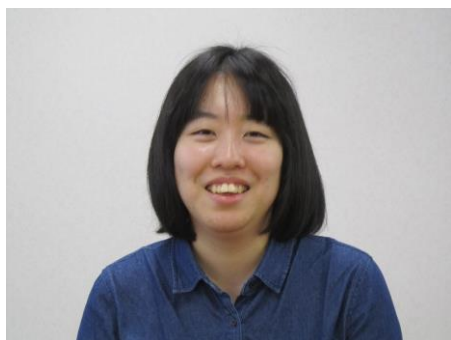
2017年4月5日 発行

Welcome to SGU Library	1 ~ 3
第7回「図書館大賞」1席受賞作品紹介	4
新入生に薦めるこの作家	5
新入生に贈るこの1冊	5 ~ 7
自著紹介	8 ~ 10
2016(平成28)年度「利用統計」	11
編集後記	12

Welcome to SGU library

はせべ あい
長谷部 愛 さん (人文学部人間科学科4年)

「新入生の皆さん、単位を取るには図書館をドンドン使おう！」



入学時より、図書館を積極的に利用されている長谷部さん。とても本がお好きということもあり、図書館で行なわれている「図書館大賞」では、3年連続の入賞を果たしています。

そんな長谷部さんに、これまでの大学生活からの新入生へのアドバイス、あわせて図書館を上手に活用する方法、4年生となった今、入学前に思い描いていた大学生活を送られて来たかどうか、そして将来の目標、最後に「図書館大賞」への思いなどを、お伺いしました。

※「図書館大賞」

図書館では、日頃から本に慣れ親しんでもらうこと、読書意欲や思考力・表現力の涵養を目的に、毎年「みんなに紹介したいオススメ本やイチオシ本の紹介文」を募集し、心に「ぐうっ」とくる作品を書いた方に図書カードを進呈しています。募集期間は毎年、9月下旬から11月上旬を予定しています。図書館ホームページや館内掲示により、お知らせ致します。

— 今年も希望に満ち溢れた新入生が入学してきました。お祝いのメッセージをひと言お願いします。

ご入学おめでとうございます。大学に入学し、将来の目標に向かっていく人もいれば、まだ目標が見つからなくて悩んでいる人もいます。どちらにしろ、まずは大学生活で「やってみたい！」と思ったことは、とりあえずやってみることをオススメします。そこから必ず得られるものがあるはずです。

— これまでの大学生活から、新入生へのアドバイス（勉強面・生活面など）をお願いします。

大学では、時間割を自分で組みます。すると、講義がない時間、いわゆる「空き時間」ができるわけですが、そこを上手く使って課題を作成するといえると思います。放課後はバイトしたい、遊びたいという人も多いと思いますので、「大学にいる時間は勉強する！」と決めるとメリハリがつくんじゃないでしょうか？

私は実家から大学に通っているのですが、一人暮らしの方にはいいアドバイスができませんし、家ではゲームばかりでグータラしているので、生活面の手本にはならないと思います(笑)。

— 積極的に図書館を利用されている長谷部さんにとって、他の学生さん、特に新入生への図書館活用法のアドバイスがあれば、お願い致します。

大学ではテストもありますが、レポートで成績を出す講義も多くあります。その時に、自分の考えをただ文字にしていただけでは、説得力がありません。そこで、文献が必要になります。インターネットで検索もいいですが、みなさんもお存知のように、中には信用できない記事も多いです。本の情報を上手に利用できるかが、レポートを書く際のカギになります。学院の図書館には専門書がたくさん置いてあるので、是非、レポート作成時には図書館を利用して、パッチリ単位を修得していただければと思います。

また、図書館にはパソコンもあり、なんとDVD・Blu-rayやCDもあります！パソコンで課題をするもよし、空き時間に映画を見るもよし。私はまだ図書館で映画を見たことがないので、卒業までには見ようと思います。

— 長谷部さんご自身についてのご質問です。

— 本学の人文学部人間科学科を選んでいただいた理由をお聞かせください。

まず、家から大学が近かったことですね。高校は電車通学だったのですが、「もう、満員電車は嫌だ」と思っていました（笑）

そこで、近くの大学を調べたところ、「人間科学科」という学科を見つけました。中高では国語や社会科が好きで、歴史や哲学、心理学などにも興味がありました。また、小学生のとき実際に原爆ドームを見て、「人間はなんで戦争をするんだらう」と考えたこともあって、人間について関心があったのだと思います。気になったので学院のオープンキャンパスに参加して、大学の雰囲気も良かったのでここに決めました。

— 大学（人文学部）での講義はいかがですか。勉強されてきて、難しかったと感じているところはありましたか。

難しいことは難しいですが、高校までの難しいとは次元が違うと感じました。正解のない難しさというか。特に人文学部は「考える」講義が多く、自分の考えの狭さに気づかされます。他にも、これまで窮屈に感じていたことが実は当たり前のことで、自分だけが変じゃないんだ、と感じたこともありました。

— いよいよ4年生となりましたが、これまで、入学前に思い描いていた大学生活を送れてきましたか。

まず、入学前にあんまり将来の目標とか、キャンパスライフとか考えていなかったです（笑）自分の好きなことが勉強できればいいかな、というくらいでした。あとは、ほとんど不安だらけでした。「4年間ぼっち確定だったらどうしよう」とか…。

でも、興味があった学校教育について学びたいと思い教職課程を履修したり、テイク（障がいのある学生の支援活動）を見て「やってみたい！」と思って講習会を受けたりと、充実はしてると思います。教職課程を取ってから、困っている人を支えられるような人間になりたいという目標ができたし、テイクを始めてからは、要約やパソコンのスキルが身について自分自身の勉強にもなったし、いろんな人と繋がりを持つことができました。聴覚障害のある学生と話したいと思って始めた手話も、最近だと日常会話くらいはできるようになったので、友達やテイクを利用している学生と手話で話すのが楽しいです。

— 本学図書館に関連する質問をさせていただきます。



— 前段で図書館活用法のアドバイスをいただきましたが、最近におけるご自身での主な利用目的は何ですか。どんなことに役立っていると感じていますか。また、館内のお気に入りの場所などがありましたら教えてください。

レポートの文献探しですね。本はもちろんですが、新聞のデータベースもあるので、最近の話題を取り上げたいときには、よく新聞記事を検索しに来ます。

私はあんまり図書館では勉強しないんですよ。静かすぎると、逆に集中できなくて（笑）ですが、図書館の1階、雑誌が置いてある本棚の近くの広い机は、勉強した気になるので結構好きで、そこが空いていれば座っています。

— 本学図書館を利用している上で、感想や要望を含め、その印象をお聞かせください。

広くて蔵書数が多く、新聞、DVD・Blu-ray・CD、パソコンもあるので、いろんな情報が揃います。最近じゃ2階が新たにラーニングcommons（学習支援を意図して設けられた施設）となって、ゼミの話し合いもできるし、車椅子学生さんも楽に2階へ入れるようになったし、とても便利だなと思います。ただ、その広さゆえ、未だに本を探すときに迷子になることがあります（笑）「〇〇書庫ってどこだ？」と…。あと、急な階段を昇るのがつらいと感じる時があります。もう年ですね（笑）

— 最後に「図書館大賞」に関してお聞かせください。

— 最初にご応募いただいた動機は何でしたか。

レポートの文献を探しに図書館に来た時に、たまたまポスターを見かけて。そんなに忙しくなかったこともあり、応募してみました。うまいこと引っかかれば、図書カードももらえるし…と思って（笑）まさか、入賞するとは思っていませんでしたが…。

— 応募してきたことで、何か自分の中で感じていることや変化したことはありますか。

小さい頃からもともと本は好きでしたし、小中学生って、作文とかを嫌がる子が多いイメージがありますが、作文を書くことも苦じゃなかったです。文集に載ったこともあったりして、先生からも作文だけは褒められていました。当時は、直接成績に関わるようなことではないし、スポーツができる子とか、勉強ができる子のほうがよっぽど羨ましいと思っていたのですが、大学生になると、卒論もあるし文章力が必要になりますよね。図書館大賞に入賞すると、いろんな人から声を掛けられるようになります、「すごいね」って。昔はあまり好きじゃなかった自分の能力？ みたいなものが、今になって生かされていると感じるのは、本当に嬉しいです。

— 執筆にあたって苦労したこと、たとえば本を他の方に薦めるという意味で、本の選定や文書表現など、特に意識したところがあれば教えてください。

レポートよりは苦労してないですね(笑) 本は自分が持っている中で、これで推薦文を書いたら面白そう、っていうことで選んでいます。文章表現が堅くなりすぎないように気を付けるくらいです。推薦文なので「これ面白いよ！」くらいのノリでいいかなと。普段レポートを書くときには、一回パソコンにバーっと打ち込んで、削って、何回も見直します。誤字脱字やわかりにくいところがないかはもちろん、口語表現っぽいと思った語句があれば直していきます。図書館大賞の場合は、口語表現は直さなくてもいいので楽です(笑)

— 4年生で色々とお忙しい学年かと思いますが、今年も、是非チャレンジをお待ちしています！
チャレンジされる場合の、意気込みをお聞かせください。

ハードルが上げられている気が…(笑) 今年も応募しようと思います！

— 3年連続の応募で、いずれも入賞を果たしてきている長谷部さんですが、新入生や在学生に対して、「図書館大賞」のアピールをお願いします。

みんな、本を読んだら、その本の推薦文を書こう！ 「図書館大賞」はわりと自由な形式で書くことができますが、文章を書くいい練習にもなると思います。是非、本が好きな人はチャレンジしてください！

— 「図書館大賞」入賞4連覇を狙ってくださいね。
突然のインタビューにもかかわらず、快くご対応いただき、ありがとうございました。
これからも図書館を大いにご利用いただき、目標に向かって頑張ってください。

長谷部さんの「図書館大賞」入賞歴



2014（平成26）年度
第5回「図書館大賞」
1席入賞 推薦図書『プチ哲学』[中公文庫]
佐藤雅彦(著)[中央公論新社 2004年]

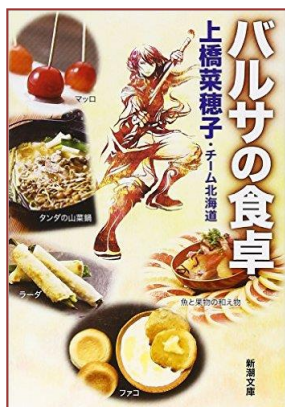
2015（平成27）年度
第6回「図書館大賞」
3席入賞 推薦図書『狐笛のかなた』[新潮文庫]
上橋菜穂子(著)[新潮社 2006年]

2016（平成28）年度
第7回「図書館大賞」
1席入賞 推薦図書『バルサの食卓』[新潮文庫] 上橋菜穂子・チーム北海道(著)[新潮社 2009年]
※ 第7回入賞作品は次ページに掲載

『バルサの食卓』[新潮文庫]

上橋菜穂子・チーム北海道（著）

〔新潮社 2009年〕



＜推薦者＞

長谷部 愛（人文学部人間科学科3年）

※ 上記は受賞当時の学年（現在4年生）

上橋菜穂子さんの作品を読んだことのある方なら、一度はこう思ったことがあるだろう。

「美味しそう、食べてみたい！」

大人気ファンタジー作品を世に送り出してきた上橋さん。その魅力の一つとして挙げられるのが、作中に出てくるおいしそうな料理の数々だ。

鍋物やお弁当、おにぎり、パン、お菓子、そして酒のつまみまで！ 実に様々な料理が出てくる。

『精霊の守り人』をはじめとする「守り人シリーズ」のバルサ、タンダ、チャグム。

『獣の奏者』のエリン、ジョウン、イアル。

『狐笛のかなた』の小夜、野火。

上橋作品の登場人物たちが食べているのは、物語の中の架空の料理だ。材料も、「ゴシヤ」という白身魚、「マイカの実」という木の実、「カンクイ」というキノコなど、架空の食材。だが、読んでいるとどれも「美味しそう」、「食べてみたい」と思うくらい、描写がリアルなのである。

そんな架空の料理の数々を、現実の世界で作って見たらどうなるか、上橋菜穂子さん監修のもと、チーム北海道（上橋さん命名）がレシピにしたものがこの本だ。チームの一員の西村淳さんは、南極料理人として有名な方である。なんとという豪華メンバー。

収録されているレシピで、私のオススメは「ジョコム」。日持ちがするよう焼きかためたお菓子で、木の実がいっぱい入っている。ナッツ類が好きなこともあるが、「ジョコム」という名前の響きも、私はとても好きだ。レシピには、こんな文章が添えられている。

オーストラリアでよく聞かされるのが、日本人の危機意識の薄さで、アウトバックと呼ばれる広大な原野に、車やバイクで出かけていくのに、予備のガソリンも水も積んでいってないやがつがある、とあきられています。（中略）旅をしている間、まず絶対に必要なものは水と食糧と保温具で、バルサの旅を描いているときには、私はこれらを欠かさぬよう気をつけていました。しかし、食糧といっても、冷蔵庫がないのですから、すぐ腐るような物では意味がありません。それに、歩くことが基本の山越えの場合、荷物の重さは疲労につながります。持ちがよくて、軽く、しかも、疲れた身体をずっと癒してくれるもの……それが、甘い携帯食なのです。

上橋菜穂子さんは、文化人類学者でもある。そのため、作品に出てくる料理は架空のものでも、上橋さんがこれまでフィールドワークで世界中を旅したときの経験や、食べた料理が元になっていたりする。また、子供の頃に欧米の児童文学を読んでいた上橋菜穂子さんの憧れや、その頃の体験もルーツとなっている。そんな作品の裏話なんかも、レシピの間に収録されているので、そちらも合わせて楽しみたい。

自宅にいながら、異国を旅している気分で作ってみてはいかがだろうか。原作小説を読みながら食べれば、より物語の世界に入り込むことができるかもしれない。

【 図書館所蔵 2層書架：文庫 596.04/UEH 】

● 新入生に薦めるこの作家 ●

～ 私は「吉本ばなな」さん・「開高 健」さんの作品をお薦めします ～

久蔵 孝幸〔人文学部准教授〕

作家の感受性というのは高度に繊細でかつ峻烈なもので、我々心理臨床に携わる者にとっても到底及ばないとよく思います。そして、それだけ際だった感性は、時にその人が生きることに害悪にさえなるだろうと、ふと思ひもします。

吉本ばななさんは、一面オカルトでもあり、荒唐無稽でもあり、しかし舞台は日常であり、その日々を生きる人々がごく普通にこの世界とあの世界の橋渡しをするかのような小説を書かれます。そして、その突飛にも感じられる出来事の中にこそ、彼女の感受性がみつけた、人の生きる本質が隠されているのです。彼女は「全てを精一杯に感じて受け止めて傷ついてきた人たち」に、作品が寄り添えることを願っています。手始めはデビュー作の「キッチン」。

もう少しディープな小説がお好みなら、日本一の修飾語句を持つ男と賞賛された開高健さんもお薦めです。従軍記者としてベトナム戦争を経験した作家の「輝ける闇」をはじめとする闇三部作もよいですが、頭くらくらするかも……。楽しいのは「オーパ!」。一生幸せになるためには、釣りを覚えると良いそうです。

※ 「キッチン」をはじめとする吉本ばなな作品 2層書架：文庫 913.6/YOS 他

※ 「開高健全作品」 C書庫：和書 918.68/KAI 他

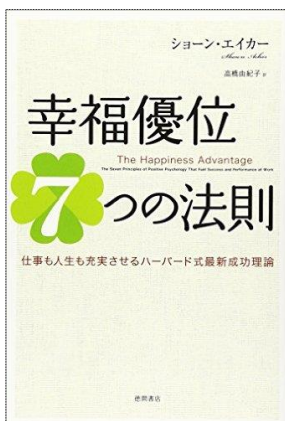
※ 「オーパ!」(開高 健作品) B書庫：A判 296.209/KAI

● 新入生に贈るこの1冊 ●

『幸福優位7つの法則：仕事も人生も充実させるハーバード式最新成功理論』

ショーン・エイカー（著） 高橋由紀子（翻訳）

< 徳間書店 2011年 >



橋長真紀子〔経営学部准教授〕

様々な幸福研究の中で、「人間の脳は、ポジティブな気分の時に最もよく働くことができている」といわれています。悲観的な営業マンより、楽観的な営業マンの方が営業成績は良く、学生においては、試験の前に幸せな気分になった学生は、普通の気分の学生よりもはるかに良い成績を取るそうです。つまり、同じ作業をするにも、その人の「心持ち」が重要で、周りに与える影響だけでなく、成果も良いものを生み出すことができるということです。本著では、幸せと成功の関係について、幸せは成功の結果ではなく、先行するものであることを、多岐にわたる実証結果から解説しています。

学生時代の4年間。同じ時間を過ごすにも、卒業時には、おのずと差がついてきます。その一因が、どのような精神状態で物事に取り組んだかによることです。是非とも学生の皆さんにはご一読いただき、残りの時間を有意義に過ごしてもらいたいと思います。

※ 現在、所蔵はありませんが、5月頃に提供予定です。

● 新入生に贈るこの1冊 ●

『この世界の片隅に』 [双葉文庫]

この史代 (原作) 蒔田陽平 (ノベライズ)

< 双葉者 2016年 >



青木栄美子 [教育支援課 博物館学準備室職員]

私が推薦するこの本を読むことになったのは、新聞のベスト映画コーナーで知り、ノベライズ作品を是非、読みたいと思ったことがきっかけでした。大切な人と出会い、そして、失い、泣き、笑い・・・、そういった人々の日常の暮らしをテーマにしている本です。主人公のすずと、その周りの人々の生きていく力と輝きがじわじわと感じられる物語で、他の本にない魅力を感じました。

感銘を受けた内容は色々とありましたが、最初から読み続けてきた上で、やはり最後の「この世界の片隅で、わたしたちの生活は続いていく」のフレーズには、思わずツーン、ジワーっと泣けてきました。また一方で、戦時下の人々の暮らし（食・住・衣・シラミのことなど）が、わかりやすく書かれていますので、生活文化史として読むのも、興味深いと思います。

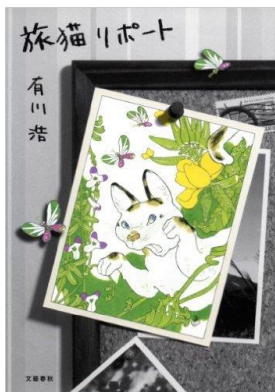
丁寧に、十分な取材・調査をして書かれた本だと思います。芯のしっかりしたストーリーが強く感動させてくれます。

※ 現在、所蔵はありませんが、5月頃に提供予定です。

『旅猫リポート』

有川 浩 (著)

< 文藝春秋 2012年 >



山口 由真 [法学部 法律学科4年]

私はもともとこの本の著者である有川浩さんの作品が好きで、有川さんの本を色々読んでいたときにこの作品と出会いました。私が今まで読んだ有川さんの作品の中で一番感動し、涙が止まらないと思っているこの本を紹介させていただきます。

内容は、「飼い猫のナナを手放さなければならなくなったサトルは、ナナの引き取り手を求め、銀色のワゴンに乗って旅をします。サトルの幼少のころから現在までを、時間を追って再確認する旅でもありました。」(Wikipedia より) 正直これだけではこの本の素晴らしさは伝わらないです。どこに感動するのか、涙を流すような場面が思い浮かばないと思いますが、読めば分かっていただけます。難しい文章は全くなく、本

が苦手な方でもとても読みやすいと思います。猫好きの方にはさらに楽しんでいただける作品となっています。

今まで本をあまり読んだことが無かった、活字が嫌い、という方はぜひ一度気になる本を手にとって読んでみてはいかがでしょうか？最初の一文を読んでみて読めそうなら少しずつ読み進めて下さい。もしかすると自分の価値観が広がるような作品に出合えるかもしれません。大学で何をすればわからない、という方は本を読むことから始めてみましょう！絶対に良かったと思う日が来ます。

【 図書館所蔵 1層書架 : 和書 913.6/ARI 】

● 新入生に贈るこの1冊 ●

『きよしこ』 [新潮文庫]

重松 清 (著)
< 新潮社 2005年 >



新山 葉月 [人文学部 臨床心理学科3年]

私がこの本を読み始めたのは、声が出なくなったために通い始めた病院の待合室でのことでした。このまま一生声が出ないままだったらという不安の中で読んだこの本には、特別な思い入れがあります。

この本は少年の成長物語です。主人公の少年きよしには吃音があり、カ行とタ行と濁音がつかえてうまく言えません。自分の名前すらうまく言えない少年が、言いたいことを先回りして通訳してくれる彼女と一緒にいる平和な生活を捨ててまで選んだものは何だったのだろうか。

さて、この本を成長物語と表現しましたが、大人になるとはどういうことでしょうか。大学生活はこれまでの学生生活に比べて自由が増えますが、その自由とは単に楽な方を選ぶことではないことを、この少年が教えてくれます。自分の人生に責任をもって選択をしなければならないこと、いばらの道だとわかっていても進まなければいけないこと……。

この物語は吃音の少年の物語ではなく、きよしという少年の物語なのです。

【 図書館所蔵 2層書架 : 文庫 913.6/SHI 】

『いなくなれ、群青』 [新潮文庫]

河野 裕 (著)
< 新潮社 2014年 >



秋山 望 [経済学部 経済学科2年]

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。私はこの文章を通して皆さんに少しでも本の魅力を感じてもらえたらいいな、と思います。

私がお薦めする一冊は『いなくなれ、群青』です。なぜこの本をお薦めするかというと、物語の情景が思い描きやすく、読みやすいからです。

本作の内容を大まかに説明します。話の舞台は、「階段島」という架空の島で、そこには自分自身により捨てられた人たちが住んでおり、一人の「魔女」によって支配されている。住人たちが平穏に暮らしていたある日の朝、住民の一人（主人公）が幼馴染の少女と再会、そこからこの物語がスタートする。彼はなぜ、彼女との再会を遂げてしまったのか。悩みにあ

げられる中で事件が起き、それによって島の謎、少女との再会の理由が明らかになる。

本を読むことはちょっとした楽しみ、旅のお供になります。この文章によって、本作、あるいは他の本を読むきっかけになれば大変嬉しい限りです。

【 図書館所蔵 2層書架 : 文庫 913.65/KON 】

『ひきこもる心のケア — ひきこもり経験者が聞く 10 のインタビュー 』

村澤和多里（監修）、杉本賢治（編）
 < 世界思想社 2015 年 >



「ひきこもり」とは、結局どのような問題なのだろうか…。このような問いかけを繰り返しながら、杉本さんがひきこもり支援の専門家の「本音」を聴きだしている点が、この本のユニークなところだと思います。

この本は札幌学院大学の卒業生で、自身もひきこもりを体験した編者（杉本賢治さん）が、ひきこもり支援の専門家に対して行ったインタビューをまとめたものです。本には 10 人のインタビューが収録されていますが、内容を豊かにしているのは、杉本さんの絶妙な質問によるものです。杉本さんは大変博識で、心理学や社会学などの専門的な話にも鋭い視線を投げかけています。

いわゆる「ひきこもり」というと、みなさんは臨床心理学や精神医学の問題と思うかもしれませんが、しかし、ひきこもりは 20 年ほど前に急に問題化してきた「社会問題」でもあります。いいかえれば、「心と社会との結び目」で起こっている問題なのです。

この本に登場する 10 人の支援者はそれぞれ別の専門分野から発言しているのですが、結果的に、その語り相互に共振している感じがあり、最終的に語りの方が収束していっています。共通問題として見えてくるのは、「過剰な競争社会化」「自己責任論の浸透」「社会の流動化の促進」ということです。このような論点が浮かび上がってきたことも、杉本さんの独特の切り口からの質問が成功しているからだと思います。

私は監修者として、この本の制作に携わりました。はじめは、杉本さんから自費出版で出されたこの本の原型をいただいたのですが、その完成度の高さから「ぜひ全国の人に読んでいただきたい」と思い、私が以前お世話になった世界思想社の編集者に相談したことから書籍化プロジェクトがはじまりました。その後、杉本さんと私と編集者で議論しながら、新たなインタビューを加えて完成したのがこの本です。

私自身は 1 年間、この本の制作にお付き合いしたのですが、その間、色々なエピソードがありました。この頃、杉本さんと私の間では「バクマン」という漫画が流行っていたのですが、ちょうどそのようなノリでいました。その漫画は、二人組の漫画家が編集者とやりとりをしながら作品を生み出していくというものです。杉本さんや編集者との熱い議論を交わしながらの作業は、思い出に残るものでした。裏話になりますが、序章や終章の杉本さんと私との対談は、締め切りの直前の夜に、羽田空港のカレー屋さんで行ったものです。かなり高いテンションで話していたので、お店の人は、気味が悪かったかもしれません。

本学の学生さんにとって、この本が面白いであろう点としては、馴染みのある先生方がインタビューに答えていることです。現在の専任教員では次の 3 人の話が載っています。

- ・ 二通諭先生（人間科学科教授）：「オーダーメイドの支援」（第 7 章）
- ・ 山本彩先生（臨床心理学科准教授）：「自閉症スペクトラムとひきこもり」（第 8 章）
- ・ 村澤和多里（臨床心理学科教授）：「モノログからダイアログへ」（第 6 章）

また、インタビューが実施された当時、本学に教員として在籍されていた先生 2 人も載っています。

- ・ 安岡譽先生（元臨床心理学科教授）：「対人恐怖とひきこもり」（第 4 章）
- ・ 橋本忠行（元臨床心理学科准教授）：「自己愛とひきこもり」（第 5 章）

その他、現在も非常勤で教鞭をふるっておられる、田中敦先生（第 3 章）、阿部幸弘先生（第 9 章）、宮崎隆志先生（第 10 章）の話にもふれることができます。

ふだん講義で接している先生たちが、どんなことを考えているのか知る機会にもなりますので、ぜひ一度手に取ってください！

【 図書館所蔵 本学教員著作コーナー（ラウンジ）：367.6/SUG
 1 層書架：和書 367.6/SUG 】

『よくわかる改憲問題 — 高校生と語り合う日本の未来 — 』

川原茂雄（著）

< 明石書店 2016年 >



2016年7月に行われた参議院議員選挙の結果によって、与党である自由民主党と公明党の議席に、改憲に前向きであるとされる政党の議席を合わせると、参議院の全議席の3分の2に達しました。これによって与党と改憲に前向きな政党の議員が全て賛成すれば、国会での改憲の発議が出来るようになりました。

日本国憲法が制定されてまもなく70年になりますが、このような状況によって、憲法制定以来はじめて、「改憲」ということが現実的な可能性をもった問題として国民の前に現れてきました。にもかかわらず、この参議院議員選挙の結果によって「改憲勢力」が3分の2に達することの意味を、選挙の前から十分に認識していた国民は多くはなかったように思います。選挙後になって、「そんなことは知らなかった」とか「改憲することまで一任したわけではない」という声が、多く聞かれました。

けれども間違いなく、これから私たち日本の国民は、この改憲問題に正面から向かい合わなければならないのです。18歳選挙権も実現し、2018年からは国民投票にも18歳から参加できることになることから、いまの高校生さらには中学生も憲法と改憲問題について、しっかりと理解することが必要になってきたと思います。

2011年3月11日に起きた東日本大震災と福島第一原発事故の後、市民に向けての「原発出前授業」を始めたことがきっかけで、翌年、『原発出前授業』という本を明石書店から上梓させて頂きました。その後、安倍政権の成立によって「改憲論議」が起きてきたことから、今度は『憲法出前授業』という本を出しましょうという話を始めたのは、4年前のことでした。当初は中高生向けに憲法について分かりやすく解説するような本の構成を考えていましたが、この間に「特定秘密保護法」の成立があり、さらには国民の多くの不安や反対の声を無視して「安保関連法（戦争法）」が国会で強行可決されるなど、憲法と改憲をめぐる状況が大きく変化していくことになったため、「改憲問題」を中心とするような本の構成に変わっていきました。

最終的には、教師である「かわはら先生」が、高校生である「けんた君」に、憲法と改憲問題についての6時間の「出前授業」をするという設定となり、本の主な内容は以下のようになっています。

- 1 時間目 いまの憲法を変えるって、何で？
- 2 時間目 憲法って何のためにあるの？
- 3 時間目 憲法を変えるって、どうやるの？
- 4 時間目 解釈で憲法を変えられるの？
- 5 時間目 憲法が変わったらどうなるの？
- 6 時間目 憲法変えるの？変えないの？

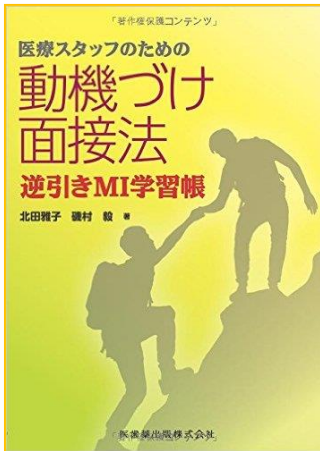
長年、学校現場での社会科（公民科）の授業で、憲法や改憲問題について生徒たちに教えてきたのですが、教室の授業ではどうしても知識や概念を教え込むようなものになりがちでした。この本では、教師と生徒の「対話形式」にして、出来るだけ読みやすく、中高生にとっても分かり易くなるような表現をこころがけました。果たして、そのような意図がうまく行っているかどうかはわかりませんが、中高生だけでなく、大学生や一般の市民の皆さんにも是非とも手に取って読んで頂きたいと思っています。

これから、いまの日本国憲法を変えようとするにしても、また、変えないようにするにしても、まずは憲法とはどのようなものであるかを知ること。そして、憲法を変えるということがどのようなことであるかをきちんと知ることは、日本の国民にとって必須のことであるように思います。そのために、この本がひとりでも多くの人たちに読んでもらえることを願っています。

【 図書館所蔵 本学教員著作コーナー（ラウンジ）：323.14/KAW
1 層書架：和書 323.14/KAW 】

『医療スタッフのための動機づけ面接法 — 逆引きMI学習帳 — 』

北田雅子、磯村 毅（著）
 < 医歯薬出版 2016年 >



動機づけ面接とは？

動機づけ面接:Motivational interviewing (以下MI)は、行動療法家であるミラー博士とロルニック博士の2人によって構築された面談スタイルで、元来、最も行動変容が困難とされたアルコール・薬物依存症者に対する面接のスタイルとして開発されたものです。MIは、クライアント中心（受容と傾聴）で、行動変容を妨げている両価性を探り、それを解消することによって行動変容への準備性を高めることを目標とします。行動を変えられない背景には、解消されていない両価性の存在があり（例：禁煙したいけど吸いたい）、そのジレンマを抱え、迷っている人を強く説得すると、心理的抵抗が生じるため、説得と反対の方向に動機づけられるのです（行動変容を起ささない）。

来談者のハートをつかみ、来談者が健康的な行動に向かっていくように導くには「受容と傾聴」だけでも、むしろ「説教や脅し」でもうまくいきません。行動科学を基礎とする科学的エビデンスに基づいた一定のスキルを習得すれば、効果的な行動変容の動機づけを行なうことが可能です。それが「動機づけ面接」です。

動機づけ面接は、行動を変える準備ができていない対象者に気付きを促し、自己決定を支援することが可能なコミュニケーションスタイルです。そのため、この本は、対人援助を専門としている専門家を対象としたものですが、子育て中の母親、会社で部下の指導をしている中間管理職が手にとってもとても参考になると思います。これまでの面談スタイルに課題や限界を感じている方には是非、読んで頂ければと思います。目の前の人のやる気スイッチを押す、何かしらのヒントが隠れていると思います。

「逆引きMI学習帳」とは？

本書を書こうと思ったきっかけは、MIの面談事例は英語が多く、英語を翻訳した資料が中心で、日本人による日本語の面談事例を中心にMIを解説した本が必要だと実感したからです。英語と日本語のニュアンスは異なりますので、できれば、日本人が実際に行った面談事例を中心にMIの魅力や面談の特徴などを解説した本があれば、MIを学ぶ人の参考になることは間違いないと考えました。

また、理論背景を理解するよりも、まずはMIによる面談事例を読んで、MIの面談スタイルを肌で感じていただきながら、そこで使われている考え方やテクニック、背景にある理論について順に学んでいく方法にしました。事例を読んでいくと「ここでは、こんな言い方ができるんだ」とか「このフレーズは真似してみたい」というような、面談者の言葉があるかもしれません。事例のセリフにはさまざまな注釈がついていますので、気になる部分の注釈を見て、そして事例ごとに載っている解説を読んで頂ければと思います。あまりにも自然に、MIが会話の中に溶け込んでいるのであれ？と思う事例もあるかもしれませんが、細かいテクニックが隠されていますので、是非、発見して頂ければと思います。ここで紹介されている事例はほんの一部ですが、全体を読み終える頃には、MIらしい面談について何となく雰囲気をご理解いただけたらと思います。

本書は、ミラー博士のMI-3という最新版をもとに面談事例を中心に書かれたわが国では初めての一冊となります。読み進めるなかで、MIがどのような面談なのか、既存の面談と何が違うのか、なぜ来談者の行動変容を促すことができるのか、これらの疑問が少しずつ解消されていくと思います。MIは面談の土台づくりに効果的です。MIスタイルの習得によって、みなさんの面談スタイルが「ダンスのような面談」に変わるとき、そこにはこれまでとは違う時間が流れ、何かが変わると思います。その何かをひとりでも多くの方に体験していただければと強く願っています。

【 図書館所蔵 本学教員著作コーナー（ラウンジ）：146.3/KIT
 1層書架：和書146.3/KIT 】

2016(平成28)年度 図書館利用統計・蔵書統計

表1. 開館日数 (日)

通常開館	休日開館	短縮開館	開館合計	休館	総計
194	43	94	331	34	365

表2. 入館者数 (人)

9:00~17:00	17:00~21:30	合計	1日当たり
151,294	34,786	186,080	562.2 [186,080÷331(開館日数)]

表3. 貸出者数 (人)

学生・院生	教職員	その他	合計
13,687	2,590	1,264	17,541

表4. 貸出冊数 (冊)

学生・院生	教職員	その他	合計
27,490 (学生・院生1人当:11.5)	8,451	4,967	40,908

表5. 貸出冊数の内訳 (冊)

	学生・院生	教職員	その他	合計	前年比
和書	23,892	6,240	4,764	34,896	86.0%
洋書	2,872	1,569	203	4,644	120.7%
雑誌	726	642	0	1,368	91.3%
合計	27,490	8,451	4,967	40,908	89.1%

表6. 第4閲覧室・グループ学習室のパソコン利用 (ログイン回数)

第4閲覧室	グループ学習室	合計	1日平均	1台平均
24,548	7,860	32,408	97.9	623.2

2016年10月よりグループ学習室はラーニングコモンズに変更

表7. 相互協力 (件)

文献複写		現物貸借	
複写依頼	複写受付	貸借依頼	貸借受付
439	1,594	140	426

表8. 蔵書冊数 (冊)

和書	洋書	図書合計	視聴覚	総合計
461,529	130,501	582,030	26,089	618,119

2016年度受入冊数: 7,527冊 (図書・製本雑誌・視聴覚資料)

2016(平成28)年度 DVD (Blu-ray含む) 視聴ランキング [Best 5]

- 第1位 メイズ・ランナー (ウェス・ボール 監督) [20世紀フォックス (2015)]
- 第2位 ワイルド・スピード:スカイミッション (ジェームズ・ワン 監督) [NBCユニバーサル (2015)]
- 第3位 アメリカン・スナイパー(クリント・イーストウッド 監督・製作) [ワーナーブラザーズ(2015)]
- 第4位 フルスロットル (カミーユ・ドゥラマーレ 監督) [アスミックエースほか (2013)]
- 第5位 ストロボ・エッジ (廣木隆一 監督) [集英社ほか (2015)]

編集後記



4月1日(土)に入学式が挙行されました。フレッシュな新入生の息吹を感じ、春の季節と共に新年度のスタートを実感しました。多くの皆さんが思い思いに目標をもって新年度を迎えたことでしょう。新生活のため・勉学や就職のため、または趣味や娯楽のための本を求めて・・・、など、目標達成に向けての情報収集に、図書館を大いにご活用ください。

また、そんな皆さんにお節介ながら、きっと役に立つであろう、興味を示すであろう、思わず読みたくなるであろう本の展示を、年間を通じて行っています。

今年度は、以下のような企画展示を予定しています。皆さんが、充実した生活を過ごす上で、少しでもお役に立てればと思っています。



<2017(平成29)年度の企画展示予定>

4月 ~ 5月	新入生歓迎の本(大学生活・勉強法・レポート作成・就活準備)
6月 ~ 8月中旬	赤と黒の本(表紙の色合いでの特集)
8月下旬~10月	文庫特集(文庫に限定してお薦めの本を特集)
11月 ~12月下旬	犬特集(次年の干支にちなんで)
12月下旬~ 2月初旬	図書館大賞(第9回の入賞作品・対象図書を展示)
2月中旬~ 3月	温くなる本(読んで身も心も思わず温くなる本を特集)

さて、多数の方々のご協力により『書林』第91号を発行することができました。4月の発行ということもあり、新入生歓迎の意を込めた内容でまとめています。今回お届けする『書林』第91号の主な内容は、次のとおりです。ご感想・ご意見などがありましたら、図書館までお寄せください。

■Welcome to SGU Library

「図書館大賞」に連続で入賞を果たしている人文学部4年生へのインタビューです。本学への入学を希望された理由や、新入生へのメッセージなどをいただきました。

■第7回「図書館大賞」1席入賞作品紹介

今年度応募される皆さんに参考にしていただきたい、前年度の1席入賞作品のご紹介です。

■新入生に薦めるこの作家

教員よりお薦めの作家2名のご紹介をいただきました。

■新入生に贈るこの1冊

学生3名と教職員2名の方々からご紹介をいただきました。どれも心に響く作品ばかりです。

■自著紹介

人文学部教員3名よりご紹介をいただきました。授業で使用されていることもあり、学ぶ上において読みやすく、実用的で解りやすい内容となっています。

札幌学院大学図書館報「書林」第91号について

*掲載記事の著作権は札幌学院大学図書館にあります。

*記事・写真の無断転載は禁止します。

*紹介図書の写真については、各出版社から掲載許諾を頂いております。

許諾を下さいました各出版社の皆様には心からお礼申し上げます。